

ハチャメチャ 16歳の吹く笛は

松本侑壬子・ジャーナリスト

ヒロイン林よし子は16歳。町外れのおんぼろ平屋に一人暮らし。親はなく、学校には行かず、祖母の遺産と祖父の軍人年金で生活している。自分でも昼間は植木職人の見習いをして働いている。

漫画のゴリラマンにそっくりな顔、わがまま、強引、おしゃれには無縁、友達は元同級生1人だけ。それと、自分の「林の笛教室」の生徒の小学生3人を子分にしている。おかつ頭にぶかぶかの戦闘服みたいなのを着ているので、見た目には男か女がよくわからない。けれども、よし子が植木職人見習いになったのは、その親方の下にはカッコいいドイツ人青年カイが働いているからで、決して自分が女であることを放棄したわけではないらしい。

よし子の夢は、歌手になること。自作の歌でいつかCDデビューして憧れの歌手と共演すること。オーディションだって、落ちたけど受けてもいるのだ。楽器は小学生が使うたて笛1本で、歌の素材は身の回りのガキどもやカイらが語る「トラウマ」の話から。代わるがわる正座して語る話を手書きのノートの五線譜に書きとめ、「よし、できた!!」。笛のメロディは、悪いけどこれが何で歌なの?って、感じ。でも、そんな歌をよし子は何冊も書きとめている。

ハイライトは、心がふれあいそうになったカイに「歌ってよ、今」と頼まれて、よし子が土手に座ったカイに向かって絶叫するように歌う場面。意味不明の曲名の変てこりんな歌だけど、よくよく歌詞を聞いてみると、ヘンだけど妙に物悲しい。声もメロディも、歌などというシロモノではないが、やさしいドイツ人は「林さん、すごくいいよ」と言ってくれた。初めてよし子16歳の素顔の笑顔

…などと書くと、まるで一貫したストーリーのある元気少女のほのかな恋物語風な錯覚を与えてしまう。ところが実は、この映画はハチャメチャだ。登場人物もそうだが、そもそも、ある映画賞の賞金50万円を元手に作りたいことを作りたいように作った、いわば荒削りな試作品のような映画だ。現実にはあり得ない場面が時々連なる。

よし子の家は、放課後の小学生や学校からずるけて来た女子高生らの一種の解放区であり、そこでたて笛で遊んだり、絵を寝転んで描いたり、そのまま転寝をしたり。現実の子どもらには、もう夢となったわんぱくなギャング時代の楽しさがいっぱい。しかしまた、勢い余れば、病院に忍び込んで入院中のよし子の父親(=よし子のトラウマの元らしい)に悪質ないたづらをして逃げもする。よし子のハチャメチャぶりは、そんなものでは収まらない。少年らはそんなよし子に吸い寄せられるかのように、付き従って悪戯に夢中だ。まるで、街中の子どもたちを引き連れて踊りながら去って行った昔話の“ハーメルンの笛吹き男”のように。

天涯孤独のよし子16歳の、実は厳しい現実を、ハチャメチャな行動でまるでファンタスチックに見せてしまう監督の腕力。例えば、「今が死ぬべき時かそうでないか、実験してやる」と突然言ったかと思うと、いきなり汲み取り式便ツポに飛び込むなんて、あり?。こんなよし子、いや、横浜聡子監督にはどんなホラーも、SF大作もかなわない。けれど、だからこそ、この29歳の新人女性監督の度胸と今後に期待をもたずにはられないのだ。映画って、思うさま勝手に作ってもいいのね、と勇気がわいてくるもの。



日本映画 (71分) / 横浜聡子監督

『ジャーマン + 雨』

渋谷ユーロスペースにて公開中 以降全国順次

